悪意の回廊

多岐川暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
悪意の回廊

【Ｎコード】
Ｎ４７６８Ｗ

【作者名】
多岐川暁

【あらすじ】
代わり映えない日常だった筈なのに、少しずつゆっくりと日常が崩壊していく。何がきっかけだったのか、由香里はまだ何一つ知らない……

Act. 01

月末ということで、二十五日までの勤務表を一枚の紙に纏めるべくパソコンに向かっていると、少しだけ影ができて顔を上げた。
「仕事中にごめんね」
話し掛けてきたのは営業一課で事務を請け負っている野口だ。同期入社ということもあり、それなりに会話をすることも多い。
「大丈夫だよ。今日までだったっけ」
二週間ほど前に回ってきた書類で、野口が退職することは連絡されていた。一課にはもう一人事務がいるが、今年入社ということもあり引き継ぎは由香里がすることになった。
基本的に由香里がいる二課も営業ということもあり、引き継ぎはさほど手間取らずに終わったが、引き継ぎ中にも野口は休んだりしていた。それだけ体調は優れない、そんな様子だった。
「そう。急なことでごめんね。山吹さんには迷惑掛けることになって」
「体調不良は仕方ないよ。今日も顔色悪いけど、大丈夫？」
見上げた野口の顔色は、相変わらず青白い。化粧はしているけど、数ヶ月前に比べたら、頬も痩せこけ、目も落窪んで見える。化粧はしていても、顔色の悪さも唇の色合いも隠しきれていない。
「最後の日くらいは出社しないと」
「確かにね。これから一課では送別会とかあるの？」
その言葉に野口は少しだけ躊躇した様子を見せてから、緩く首を横に振った。由香里のいる二課に比べて、営業一課はかなり忙しい。俗に言う営業の花形部署でもある。けれども、気兼ねなく課内の人間が話す様子から仲がいいのは一目瞭然だ。
それなのに、病気療養で退職する野口のため、送別会をしないということは酷く意外に思えた。少なくとも、何かあれば飲み会をしている一課にしては珍しい。

ただ、これだけ顔色の悪い野口を見れば、送別会という名の飲み会をするには難しいかもしれない。恐らく一課の自粛、といったところなのだろう。

ちらりと一課へと視線を向ければ、営業ということもあって、一課のデスクにはほとんど人影はない。座っているのは、それこそ今年新人で入った事務の相沢と、一課課長の空峰の二人だけだ。

「とりあえず、大まかな引き継ぎも終わってるし、相沢さんのことも聞いてるから大丈夫。でも、余り無理しないでね」

「うん……あの」

「ん？」

短く問い掛けたけど、しばらく何か言おうと逡巡していた野口は、結局ゆるく頭を振った。ふわふわした優しげな茶色の髪がやんわりと揺れる。

「ごめん、何でもない。迷惑かける事になったけど、あとはお願い」

「分かった。顔色悪いし、本当に無理しないでね。とにかく身体を元に戻すことを考えてゆっくりしなよ。体調良くなったらお茶くらいはしたいし」

「その時はきちんと連絡するね」

どこかぎこちなく笑った野口は、最後にお礼を言うと自席へと戻っていく。その後ろ姿を見ても、線が一際細くなったことが分かる。

元々、同期とはいっても仲が良かった訳じゃない。一緒にお弁当を食べたりはしていたけど、余り突っ込んだ話しをしたことはない。

それでも、異様なほどやつれていく様子に理由を聞いたことはある。ただその時は、野口はダイエットだと言っていたこともあり、余り無理したら身体壊すから止めた方がいい、とは伝えた。

実際、野口はダイエットを必要とするほどの体型だとは思えなかった。ただ、その時は余り強くいうこともなかった。あくまで会社の知人程度の人間に、強く言う気にもなれなかったからだ。

けれども、こうして体調を崩して線の細くなった野口を見ていると、もう少し強く言うべきだったかもしれない、と少しだけ後ろめ

たい気持ちになる。
もしも、なんてものはない。けれども、あの時強く言っていれば、ここまでならなかったかもしれない、という気持ちはどうしても膨らむ。
仕事の手を止めてぼんやりそんなことを考えていれば、背後から肩を叩かれた。
「ぼんやりしてどうした？」
「ちょっと考え事。一旦戻り？」
「そう。呼び出されて行ったのに、本人不在ってどうよ」
「しつこいから嫌がらせとか？」
「それ言っちゃ俺たちの仕事は終わりでしょ。しつこくしてなんぼなんだから」
そう言って情けない顔をするのは、同期で二課営業の内海だ。新人研修から何かとうまが合い、それ以来何かと話すことが多い。
気の回る同期で、進んで他人と関わろうとしない由香里に、何かと声を掛けてくる。それを煩わしく思わせないことが凄いと思う。
周りに気遣いができ、顔立ちも整っているとなれば、社内での人気も高い。だから他の課の人間から由香里は羨ましがられるが、残念ながら内海の顔は由香里の好みじゃない。
ただ、遠慮のいらない相手であるのも確かで、由香里が遠慮なく軽口を叩く相手は社内でも内海くらいなものだ。
「冗談よ。冷たい麦茶でも入れてこようか？」
「サンキュー、夏の暑さは本気できつい」
「お疲れさま。ちょっと待ってて」
途中まで打ち込んであったデータを一旦保存すると、給湯室へ向かうために由香里は席を立った。よほど暑かったのか、内海はスーツの上着を脱ごうとしているところを課長の呼ばれ、慌ててスーツを着直していた。
課から近い給湯室で冷蔵庫に入っていた麦茶をグラスに注ぐ。最初は内海の分だけだったが、結局、課内全員分のグラスを用意して

麦茶を淹れる。
課内全員分と言っても、用意したグラスは全部で九つだ。一課、二課の課長、それから由香里を含めた事務員四人分、事務長、部長、そして内海の分だ。三課の課長は朝から出張で今日は出社していない。
営業部は全員で五十人ほどの大所帯だが、午前十一時では大抵全員が出払っている。内海が昼前に戻ってきたのも珍しいことだ。
お盆に用意したグラスを持ち、課内に戻るとまず向かったのは部長のところだ。去年から部長になった江崎は、かなりやり手らしい。実際、課内の人間がやってしまったミスに自ら率先して動くタイプだから、課内の受けも良い。
中途入社組であり、社長の甥ということで上に対しての発言権も大きい。そのために、課長クラスは酷くやりにくそうではある。それを差し引いたとしても、課長クラスのフォローもしているからケチのつけようがない。
鋭い目つきと、どこか鋭い雰囲気を持つ江崎は、人なつこさを見せる内海とは対照的に敬遠されがちだ。ツヤを消したシルバーフレームの眼鏡が、鋭さをさらに助長している気がする。
だが、事務の女性陣にも気遣いできる人だということをもう知っている。
「こちらに置いておきます」
「あぁ、ありがとう。だが、こういうことはしなくていい。君の仕事もあるだろう」
「私が飲みたかったから、ついでです」
まず江崎が就任してから、掃除やお茶汲みから事務の女性陣は解放された。それぞれが飲みたい時に自分で取りに行く。掃除は新人が毎日交代で行う。そのかわり、事務の仕事は前に比べたら重要なものが回ってくるようになった。
それはある意味、やりがいのあるもので、女性陣にも非常に受けが良かった。

「君は同期に甘いな」
近くにいる由香里にだけ聞こえるような声は、他の人間に聞かせないための気遣いだろう。どうやら先程の内海と交わした会話をしっかりと聞かれていたらしい。ちらりと見上げてきた江崎の口元には小さく苦笑が浮かんでいる。
「今後気をつけます」
「まぁ、それくらいは構わないだろう。目に見えて贔屓する訳でなければな」
そう言って僅かに笑う江崎は、正直いって悪人顔だ。初めて会ってヤクザと言われたら、恐らく誰もが信じるに違いない。いかつい顔つき、という訳ではない。恐らく一般的にいえば、整った顔立ちだとは思う。
けれども、いかんせん醸し出す雰囲気が鋭すぎて、どうにも一般人には見えない。けれども、営業課においては既にいなくては困る、そんな存在でもある。
一礼して部長の前を立ち去ると、先に一課の課長にもグラスを渡す。事なかれ主義という一課の空峰課長は、腰が低く押しに弱いタイプだ。けれども、お礼はきちんと言うタイプだし、由香里としては近くにいないからこそ、余り気にならないタイプだ。
「ありがとう」
ほんわかという雰囲気が似合う空峰は、課長という役職にはそぐわない。そう評したのは、まだ元気だった時の野口だ。
その野口も退職していなくなる。そうなると女性同期で残っているのは、由香里と三課で事務をしている倉田の二人だけだ。
元々、女性の同期が少ないこともあったが、最初の二割りしか残っていないのは、今年頭で入社四年目になったことも大きい。三年を区切りにして辞めた人間が多い。だから、男女合わせても、既に同期は四割弱程度しかない。
別に仲良くしていた同期がいる訳ではないから、寂しいとは感じない。そもそも、退職だって人それぞれ色々考え方があるに違いな

い。
　そんなことを考えながら、二課の課長の前に立つとグラスを置いた。二課の課長である碓井は、まさに名前の通り影が薄い。口を開くことは滅多になく、寡黙というよりも陰気だ。数年碓井の下にいるが、由香里自身交わした会話は数少ない。
　部下が何かしても、賞賛することもなければ、叱責することもない。ミスが発覚すれば、個々の責任だと言って、自ら動く事もない。何もしない口も出さない上司となれば、存在が薄くなるのは当たり前だと思う。
　ただ、本人はそれでいいと思っているのか、相変わらず何も変わらない。ただ黙って課長席にいるだけだ。恐らく年内に降格もあるだろう、というのは二課にいる営業の人たちの言葉だ。
　実際、問題があれば碓井を飛び越えて、江崎に報告するというのが二課では暗黙の了承となっている。
　無言でグラスを受け取った碓井は、やはり何か言うことなく手元の書類へと視線を落としてしまう。
　内心溜息をつきながら、碓井から離れた由香里は、事務長である渡瀬のデスクを周り、一課の野口や相沢、そして三課の倉田にもグラスを配ると、最後に内海へとグラスを手渡した。
「はい、どうぞ」
「サンキュ」
　笑顔で受け取った内海は文句を言うこともなく、グラスに口をつけた。見る見る間にグラスの中にあった麦茶は飲干され、最後にグラスから口を話した内海は酷く満足げに溜息をついた。
「あー、生き返った。本当にありがとな」
「別に大したことはしてないよ。暑い中お疲れさま」
「おっ、珍しく優しい」
　少し浮かれた口調になる内海に、由香里はすぐさま書類を突きつけた。
「生き返ったところ、これ修正。請求書の類いは紙に張ってから提

出。それから、勤務表に間違い。赤でチェックしてあるから、修正後提出」
「ちょっ、山吹さーん。これくらいは甘く見てよ。同期のよしみで」
「そんなよしみならいらないから」
さらに突きつければ、情けない顔をしながら内海は書類を受け取った。表情がくるくると変わる内海は、これでも外に出れば立派な営業マンらしい。
実際、課内での売上は平均以上を叩き出しているし、入社年数からいけばかなり頑張っている方だろう。これだけ感情が顔に現れるのに営業が勤まるのかと思わないでもないが、やっぱり社内は社内、外は外、だということなのかもしれない。
一旦トレーを給湯室へ持ち帰り、今度こそ落ち着いて自席へ戻るとグラスに口をつけた。ひんやりとした麦茶が喉から胃へと流れ落ちていくのが分かる。
改めて気を取り直すと、再び出勤簿を精査するために由香里はパソコンへと向かった。

＊　＊　＊

昼前には本日付けで退社する野口が挨拶をして課内から出て行った。見送ったのは課内にいた僅かな人数だけで、少しだけ野口が気の毒になる。相変わらず青白い顔をしている野口は、それでも微かに笑みを浮かべると最後に一礼して立ち去った。
そして、由香里はいつものように手作り弁当を片手に小会議室へと向かう。幾つかの会議室の内、一番小さい会議室で昼食を取る。由香里と野口、そして倉田の三人で昼食を取るのがいつものことだったが、野口が退職した今、寂しいことになるだろう。
とはいっても、ここ最近は野口が出勤していないこともあり、倉田との昼食に慣れつつあった。時折、他の同期が混じることもあるが、基本は由香里と倉田の二人だけだった。

「なぁ、俺も入れてくれないか？」
小会議室に向かう足を止めさせたのは、内海のそんな一言だった。
「それは別に構わないけど、出先はいいの？」
「連絡取ったら、急な出張で九州に飛んでるらしくて午後一からは別の会社を回ることにした。どうせなら昼食とってから出たいし。それにあそこで食うのも何だろ？」
確かに内海の気持ちも分からなくはない。由香里たち事務の女性陣が課内から出てしまえば、部屋に残されているのは課長二人と部長の三人だけになる。由香里自身もあそこで弁当を広げたいとは思わない。
「まぁ、好きにしたら。他の同期も気が向いた時には合流みたいな感じだし」
「え？　他の連中もいることあるのか？」
「他の階から来ることもあるよ。まぁ、ほとんどが野口さんか倉田さん目当てだったみたいだけど」
「あぁ、野口さんすっかりやつれちゃってたな」
「うん……病気って怖いね」
「……だな」
丁度会話が途切れたところでエレベーターホールに到着し、内海は近くのコンビニで昼食を買ってくるということで別れた。由香里はエレベーターホールを通り抜け、その先にある会議室へと向かった。
第一から第六まである会議室は、それぞれ大きさが異なる。第一会議室はきちんと応接室の様相を呈していて、大抵大口の顧客はここか、社長室の隣にある応接室に通される。
第二会議室は三十名程の人間が入れるようになっていて、部会などは第二が遣われる。第三以降については徐々に小さくなり、第六会議室にいたっては会議机二本にパイプ椅子が六脚、それしか用意できないようなこじんまりとした部屋だ。
一番端にある第六会議室で一応ノックをして扉を開ければ、既に

倉田が待っていた。
「遅い」
「ごめん、ちょっとキリのいいところまでと思ったら遅れた。あとから内海もここに来るから」
「珍しいね」
「午後一から出るから、課内でぼっちにしないでくれって」
途端に笑い出す倉田も、あそこに残される内海を想像したのかもしれない。
「まぁ、あの三人の中に取り残されたくはないよね。私だってごめんだし」
そう言って肩を竦める倉田の意見に、由香里も同感だ。あの中で食事なんてしたら、消化に悪そうだと思う。
「さてと」
そんな声と共に倉田が小さいバッグから取り出したのは、昼食ではなくメイクポーチだ。いつもであれば食後にするメイクだけど、今日は内海がくるから気合を入れる、ということなのだろう。
そんな倉田を視界の端に入れながら、由香里は小さなバッグから家で作ってきた弁当箱を取り出した。
倉田は由香里と違い、男性に良い顔をしたいタイプだ。由香里は残念ながら両親が不仲だったこともあり、恋人という存在に意義を見い出せない。だから年齢イコール恋人がいない年数だ。
別に縁がなかったということもない。学生時代には告白されたこともあったが、別段必要に感じたこともなかったから全てお断りしている。
それなりに身ぎれいにはしているけど、それは一般的なもので服飾にお金を掛けるのは季節の変わり目だけだ。それ以外は老後のために貯蓄に回すようにしている。
だから化粧品もドラッグストアで買える、自分の年代に合ったものしか買ったことはない。倉田が持つようなブランドもの化粧品には、正直興味がなかった。

「ねぇ、こっちの色とこっちの色、どっちがいいと思う？」
「右側のは赤すぎでしょ。別に職場じゃなければありだと思うけど、職場でそれは引く人もいるんじゃない？」
「やっぱりそっか。仕方ない、今日はこれにしておこう」
そう言って倉田はポーチからリップライナーを取り出すと、唇の輪郭から整えていく。由香里であれば、直接口紅を塗って終了だ。でも、努力しているだけあって、倉田は社内でも評判の美人だ。
そういう意味では今日退社した野口も美人だった。倉田がくっきりした美人だとしたら、野口は可愛い感じの美人だった。今日会った感じでは、面影はあるものの、あの頃の可愛らしさはすっかり影を潜めてしまっていた。
「野口さん、何の病気だったのかな」
「山吹さん、まさか病気療養って理由、本気にしてる訳？」
「違うの？」
「違うよ。一課に高井さんっていたの覚えてる？」
「あぁ、七月で退職した高井さんでしょ？」
「残業してた野口さんに乱暴したらしいの」
「……は？　乱暴って」
余りにも予想外な言葉に、弁当の蓋を開けようとして由香里の手も止まる。そんな由香里を気にした様子もなく、倉田は鏡と向き合いながら話しを続ける。
「だから高井さんが野口さんを強姦したの」
「嘘、だって高井さんでもの凄い愛妻家だったでしょ？」
「愛妻家なんて、幾らでもそんなふりできるでしょ。加害者だった高井さんは即刻クビ。でも、野口さんも辛かったんじゃないかな。本当に病気みたいにやつれちゃってたし」
「……そんなの、全然知らなかった」
「公然の秘密ってやつだったんだけど、山吹さん、そういうことに疎そうだから誰も言えなかったんじゃないの」
「この年でそこまで純情乙女な訳ないんだけどね」

「まぁ、男が夢見る純情なんて、あってなきがごとしよね。この年になると」
最後に鏡で唇をチェックした倉田は、ようやく弁当を取り出した。
大学を卒業して四年、由香里も倉田も同年の二十六歳になる。同期の野口や内海も同じ年だ。まだ若輩と言われるけど、社会に出ていれば誰しもそれなりの洗礼は受けている。いつまでも純情でなんかいられない。
ふと、先程内海としていた会話を思い出す。病気だと言った由香里に、内海は微妙な間を置いてから同意した。だとしたら、内海はあの時点で既にその噂を知っていたのかもしれない。
だったら教えてくれたらよかったのに。そう思ってしまうのは、いささか八つ当たり気味かもしれない。
室内にノックの音が響き、倉田が返事をする。扉を開けて入ってきたのは内海で、由香里はつい内海を軽く睨みつけてしまった。

Act. 02

夕方四時時になり、由香里は課内の人間に一旦声を掛けると、本日二課で発注のあった物をパソコンで取りまとめる。各自入力された伝票から発注数値を拾いだし、それを一枚の紙にまとめる。

これは数年前までは由香里の仕事ではなかった。部長である江崎が来てからまかされるようになった、課内において大事な仕事だ。

由香里の勤める会社は金属部品を提供する会社で、物によっては新規に工場へ製造をお願いすることもある。

けれども、由香里がいる二課では既存商品を売買するだけなので、新規のような複雑なものはない。

全てのデータを取りまとめると、四時半を回っていた。この時間になると殆どの人が自席へと戻り、報告書などを手掛けている。勿論、帰ってこない人もいるが、そういう人たちからは発注書ではなく、直接由香里にメールが入ってきている。

その全てを書面に起こすと、プリントアウトして最終確認を行う。ここで発注を間違えれば大惨事だ。足りなければ信頼を失い、多ければ会社の損害になる。

部品とはいっても、特殊な物が多く、在庫を持っていても次にいつ発注がくるのか分からない。既存の部品は数千もの種類に及ぶ。だからこそ、由香里は確認だけは必ずしっかり行い、それから席を立った。

向かう先は事務長のデスクだ。営業部の事務を取り仕切るのは事務長である渡瀬だ。既に四十を過ぎる渡瀬は、社内で長老組の一人だ。会社ができて間もなく入社した渡瀬に夫はいない。

だから進んで残業もするし、誰よりも働く。無愛想ではあるものの、事務の仕事であれば渡瀬にできないことはない。

正直、由香里は無愛想な渡瀬が苦手ではあったが、仕事面では信頼していた。指摘は的確だし、上のご機嫌伺いのために物事を曲げ

ることもない。
「渡瀬さん、チェックお願いします」
「預かるわ。山吹さんの書類はミスが少なくて安心できるわね」
どこか突き放したような声だったけど、これは渡瀬にしてはかなりの褒め言葉だ。
「有難うございます」
「これはチェックしておくけど、ちょっと相沢さんの方を見てやって貰える？　まだ相沢さんから休暇申請も勤怠も出てないから」
「分かりました」
渡瀬の視線が相沢に向けられ、つられるように由香里も相沢に視線を向ける。一課の人間と話しているらしく、和気あいあいとした雰囲気だったが完全に手が止まっている。
終業は六時ということもあり、これ以上遅くなれば渡瀬が帰る時間が遅くなってしまう。微かに聞こえた渡瀬の溜息を聞きつつ、由香里は相沢へと歩き出した。
相沢は今年入社したばかりで、誰に対しても愛想がいい。だから男性陣からの受けもよく、倉田曰く、第二の野口などと言っていた。
実際、可愛らしい容姿は一目を惹くもので、彼女の周りには男女問わず人が多い。確かに今年入社ということで、四年目の由香里とは違い同期が多くいるのも原因だろう。
別に私語は構わない。由香里だってすることはあるし、何よりも部長である江崎もそこまでうるさく言うことはない。ただ、時間が迫る仕事があるにも関わらず私語をかわす姿勢は好きになれない。
新入社員だから仕方ない、そう思う部分も確かにある。でも、それに甘えられて寄り掛かられるのも困る。
それこそ数年前であれば、それもありだったかもしれない。けれども、今はやるべきこともあり、連携していることで周りに迷惑が掛かる。
だからこそ、由香里は相沢の席に近づくと声を掛けた。
「相沢さん、休暇申請の書類と、勤怠のまとめできたかな」

「あ……すみません。今すぐやります」
「あとどれくらいで出来る？　もし時間か掛かるようなら手分けするけど」
「あと一時間くらいで出来るので大丈夫です」
「一時間も掛かるなら手伝うよ。どっちの方がいい？」
「大丈夫です。できるだけ早く上がるように頑張りますから」
「でも……」
一時間も掛かれば、渡瀬に迷惑が掛かる、と続けようとした言葉は、近くにいた一課の人間に遮られた。
「本人やる気になってるんだし、やらせたらいいだろ」
「そもそも、渡瀬さんが言うならともかく、何で山吹さんが言うんだよ」
いきなり他の人間に口を挟まれて、由香里は間に入った二人へと目を向ける。何度か話したことのある一課の人間だったが、その表情はうざったいといわんばかりのものだ。
元々愛想のいい二人なだけに、その表情に面食らう。けれども、言われたままという訳にもいかず、口を開こうとしたところで背後から声を掛けられた。
「私がお願いしたの。そもそも、一課の事務を請け負ってるのは山吹さんなのだから、おかしなことじゃないでしょ。あくまで相沢さんはまだ補佐という立場なのだから。それに、相沢さんが早く終わってくれないと、私も帰れないの。分かるかしら？」
振り返れば、そこには渡瀬が立っていて、見るに見かねて席を立った、ということらしい。さすがに古株の渡瀬に文句を言うことはなく、そそくさと二人は自席へと戻っていった。
「それで、相沢さんはどこまでできてるの？」
「休暇申請の書類があと少しで終わります」
「じゃあ、山吹さんは一課の勤怠お願い。午後一からやってるのにまだ終わらないってことは、あと一時間で終わるとは思えないから。山吹さん、お願いできる？」

「分かりました」
返事をして自席へ戻るために踵を返す。席に座る寸前に見た相沢は目に涙を浮かべていて、少しだけうんざりした気分にさせられる。
そして、仕事に甘えを許さない渡瀬は、更に厳しい顔をして相沢を見下ろしていた。少し声のトーンを落とした二人の会話は聞こえない。けれども、ボロボロと泣く相沢の世話は大変に違いない。
渡瀬に同情しつつも、由香里は勤怠書類を作るためにパソコンへと向かう。万事あの調子だったとしたら、辞めた野口は大変だったに違いない。
そんなことを考えながら小さく溜息をつくと、由香里は気持ちを切り替えてキーボードを叩き始めた。
集中してしまえば、周りの音は気にならなくなる。しばらくは無心でキーを叩き、書類を作り上げた時には、既に七時を回ろうとしていた。
勤怠といっても時間を書くだけではなく、毎日提出される個々の報告書の一部をコピーしてまとめなければならない。単純に思われるが、意外に時間の掛かる作業でもあった。
相沢は一時間でできると言っていたが、一課の勤怠書類はまっさらなままだった。慣れている由香里ですら二時間ほど掛かっているのに、まだ慣れない相沢が一時間でできたとはとても思えない。
これから仕事の分量すら量れない相沢と仕事をしていくのかと思うと、酷く気が重い。由香里にとって一番面倒なのは、怒っている訳でもないのに泣かれることだ。
ちらりと一課へ視線を向ければ、すでに終わって帰ったとばかり思っていた相沢はまだ自席にいた。いささか呆れながらも、内心を隠して由香里は席を立つ。
プリンターは二課で一台共有のため、デスクを回って印刷した勤怠を取りに向かう。机と机の間にある通路は、狭いものではない。
それにも関わらず、前から歩いてきた二課の松本は、まるで由香里との接触を避けるかのように端へ寄る。今までにないその反応に

松本を見上げれば、途端に視線を反らされた。
由香里としては松本に何かをした記憶はない。思わず眉根を寄せて松本を見つめていたが、すれ違うまで松本は視線を合わせなかった。
二年先輩である営業の松本とは、元々仕事以上の話しをしたことはない。けれども、こういう微妙な反応をされたことは始めてだった。
不可思議に思いながら、プリンターから吐き出された書類を取り出すと、一度自席に戻りチェックを行う。全てのチェックを行い、修正がないことを確認してから再び由香里は席をたった。
出来上がった書類を手に渡瀬の前に立つと、キーを叩いていた手が止まりこちらを見上げる。
「終わった？」
「はい、これでお願いします」
受け取った渡瀬の視線が書類の上を走る。渡瀬の視線はまるで速読でもしているかのように見える。けれども、これでしっかりとチェックしているし、駄目なものはすぐに突き返される。
「大丈夫ね。山吹さんは今日これで上がっていいわ」
「でも、相沢さんは」
「いいわ。今日は私が見ておくから。お疲れさま」
こちらに視線を向けることなく、渡瀬の視線はパソコンのモニターに向けられ、指が走りだす。そんな渡瀬に「お疲れさまでした」と声を掛けてから、由香里は自分の机に戻った。
確かに任されたのは由香里だが、渡瀬に言われたらそれ以上言い募ることはできないし、しようとも思わない。長年いるだけあって、渡瀬は仕事も早い。
少なくとも、由香里がここに残っても渡瀬の役に立てることはない。何よりも、由香里が作成した勤怠の書類を渡してしまえば、残るは相沢の書類待ちというところだろう。
渡瀬は分散することをしっているから、何かあれば由香里にも声

を掛けてくる。それは数年来の信頼でもあった。
自分の机を片付け、課内から出る時に「お疲れさまでした」と声を掛ければ、室内からはいくつか幾つかの声が返ってきた。
人数の割りには少ないその声に振り返れば、こちらに視線を向ける人はほとんどいない。別段、いつもと代わり映えない気がする。けれども、由香里は違和感を覚えながら、廊下を歩きだした。
何が気になったのか自分でも分からない。けれども、微かな違和感が喉につかえた小骨のように気になる。自分でも納得いかないまま廊下突き当たりにある女子更衣室の扉を開けた。
「お疲れー」
そんな声で出迎えてくれたのは、既に着替えを終えた倉田だ。パーテーションの向こう側に回れば、ロッカー扉の裏側についた鏡で化粧を直している。先ほどまでバレッタでひとまとめにされていた髪は、緩いパーマが掛かり空調でふわりと揺れている。
「お疲れさま」
「災難だったね、山吹さん」
「ん？　何が？」
「相沢さんが下につくことになって」
「あぁ……」
納得の相槌を打ちながら、由香里は制服であるベストのボタンを外していく。
事務の制服は全て統一されていて、ベスト、ブラウス、胸元のリボン、タイトスカートの四点セットで会社から貸し出されている。それらを脱ぎながら、由香里は小さくため息をついた。
正直言えば、もの凄く面倒だと思う。特に相沢みたいなタイプは、由香里が一番苦手とするタイプだ。
「確かに可愛いけどさ、何でも泣いて済まそうっていうのは本当に勘弁して欲しいよね。何しに来てるんだって思うし」
「野口さん、あの相沢さん相手にどうやってたんだろう」
ため息混じりにぼやきながら、着ていた制服をハンガーに掛けて

ロッカーへと片付けていく。
「野口さんの場合、あのほわほわした雰囲気で誰とでも上手くやりそうな気がするけどね。それに仕事もできる人だったし」
確かに野口が誰かと上手くいかない、という話しは一度だって聞いたことはない。それどころか、愚痴だって聞いたことないのだから凄いと思う。
「これから憂鬱」
「まぁ、頑張れ。あーあ、私の下にも来年は新人くるんだろうな」
最後に唇を軽く合わせて口紅を馴染ませた倉田は、しっかりアフターファイブを楽しめる格好となっている。
「よし、できた。今日は他の課と飲み会なんだ。山吹さんもくる？」
「パス、パス。私がそういうの行かないの知ってるのに聞かないでよ」
「あはは、たまにはいいかと思って聞いてみた。まぁ、女の人数が足りないっていう下心もあったけど」
そう言ってカラッと笑う倉田は、ドルマンワンピースにショートパンツ、そしてヒールの高いグラディエーターサンダルという格好だ。由香里自身はしない格好だったが、アクティブな倉田にはよく似合っていた。
「私の分まで楽しんできてよ」
「山吹さんの分とは言わず、楽しめるものは全て楽しんでくるから。それじゃあ、お疲れさまー」
浮き足立つ倉田に、お疲れさまと声を掛けると軽やかな足取りで倉田は更衣室を出て行った。
一人更衣室に残された由香里は小さくため息をつくと、自分も着替えるべくロッカーにかけてあるマキシワンピースを取り出すと身につけた。上からボレロを着ると、由香里の着替えは終了だ。
バレッタで留めてあった髪を下ろすと、肩胛骨辺りまで伸びた髪がばさりと落ちる。ロッカーの扉についたポケットから黒い髪ゴムを取り出すと、いつものように両サイドで結ぶ。

一応、鏡で剥がれてしまった口紅を塗り直し、少しだけ浮いた化粧をパウダーで抑える。
幾ら化粧に興味がないとはいっても、最低限の身繕いをすることくらいは必要だと思っている。興味がなくても、他人から浮くような真似はしたくない。
鏡で自分を確認してから、きっちりめのトートバッグを取り出すと肩に掛けてロッカーを閉めた。誰もいない更衣室を電気を消して出ると、エレベーターに乗り一階へと下りる。
エレベーターから降りて数歩進んだところで、名前を呼ばれて立ち止まる。ロビーのソファから立ち上がったのは内海だ。少なくとも由香里が課を出る少し前に内海は帰った筈だった。
「どうしたの、こんなところで」
「話しがあって待ってたんだ。少し付き合って貰っていいかな」
「ここじゃダメなの？」
「ダメ」
即答されてしまい、由香里は小さくため息をついた。別に由香里としても用事がある訳じゃない。まっすぐ家に帰るだけだし、問題は何もない。
「……分かった。じゃあ、夕飯でも取りながら話し聞くよ」
「それならお勧めのところがあるから、そこに行こう」
「美味しいの？」
「そりゃあ、美味しくなかったら人を連れていかないでしょ。大丈夫、俺は美味いと思ってる」
「それじゃあ、少し期待させて貰う」
ロビーから二人並んで歩き出せば、足早にすぐ横を二課の松本が歩いて行く。ちらりとこちらを見たその口元に、蔑み混じりの笑みが浮かぶ。
その笑みを見た途端、先ほどあからさまに避けられたことを思いだす。一体何が言いたいんだろう、と思いつつ松本のその背中を眺める。

「山吹さん？　松本さんがどうかした？」
「別に何でもない。ところでどこに行くの？」
そこからは、これから行くお店が何かお勧めだとか、近くにあるあの店が美味しなどと雑談に花が咲く。由香里自身、外食することは少ないので、お勧めの店を聞くことは楽しかった。
連れて行かれた店は、さほど格式張った店ではなく、どちらかといえば家族でくる洋食屋という感じだった。
けれども、係の人に促されて座ったテーブルは真っ白なクロスが敷かれ清潔感に溢れていた。中央には透明な水の入ったガラスの器があり、中には紫の睡蓮が浮かぶ。涼しげに飾られた花を見て、自然と笑みが浮かんだ。
上からの照明で睡蓮の花びらが薄く透け、真っ白なクロスに紫を映す。既に夏の終わりだけど、外の蒸し暑さには辟易していた。だからこそ、目から涼む風景というのは心和むものでもあった。
「内海さんにしては、意外な選択」
「意外って……まぁ、確かに営業先の女性に連れてきて貰ったから知ってたんだけどさ」
話しながらも内海は窓際に置かれたメニューを手に取ると、由香里に差し出してくる。それに対して、由香里は緩く首を振った。
「折角お勧めされたし、私はホタテのクリームコロッケかな」
「じゃあ、俺はカツレツで」
頼むべきものはすぐに決まってしまい、席を案内してくれた係の人間に伝える。一礼して係の人間が立ち去るのを見送った後、由香里は正面に座る内海に顔を向けた。
「それで、話しってなに？」
「あ……それは食べ終わってからでいいか？」
「別に構わないよ。じゃあ、食後のコーヒーでも飲む時に聞く」
一体、内海がどんな話しをしたいのか由香里には想像もつかない。ただ、こうして同期で集まる時以外に内海と食事をするのは初めてのことだ。

いや、それ以前に、会社の人間と二人だけで外食する、ということが初めてのことだ。できるだけ個別の誘いには乗らないようにしているし、会社の人間とは距離を取るようにしている。

何かもめ事が起きれば面倒だし、馴れ合いになるのも面倒くさい。適度に距離がある方が踏み込まれないし、踏み込む必要もない。その距離感が由香里にとって、会社の人間との楽な距離感だった。

だから、こうして内海と二人だけで食事を取るのは少し緊張する。それでも内海がふってくる話題は豊富で、緊張は由香里が思っていたよりも早く解けた。

しばらく待った末に出てきた料理は、彩りも豊かで美味しいといえば内海は鼻高々だ。気兼ねなくかわす会話が楽しかったこともあり、油断もしていた。

美味しい食事を取った最後に出てきたコーヒーに口をつける。正面には同じようにコーヒーを飲む内海。けれども、さきほどまで朗らかな様子だった内海の口数は明らかに減っている。

「それで、話しってなに？」

仕方なく由香里から話しを振ったけれども、曖昧な表情で内海はまだ話すことを迷っているようにも見えた。だから、コーヒーを飲んで内海が話しだすのを待つ。

実際、由香里としては内海が話そうと話さなくても、どちらでもよかった。少なくとも美味しい食事と楽しい会話をできたのだから、それだけで満足だった。

「……山吹さんはさ」

ようやく口を開いた内海に、由香里は手にしていたカップをソーサーに戻した。先程とは打って変わって真面目な顔をする内海は、いつものようなおちゃらけた雰囲気はない。

確かにこういう顔をしていれば、やり手営業マンと言われても納得できる。顔立ちも整っているし、こういう二面性があるから他の女性社員たちが騒ぐのかもしれない。

「社内にある噂とか耳にすることある？」

余りにも予想外の話しに、由香里は眉根を寄せる。けれども、すぐに野口の噂を思いだす。
「それって野口さんの噂のことについて？」
「まぁ、それもあるけど」
「全然知らなかったから、どうして内海さんが教えてくれなかったのか不思議に思ってたところだけど」
「ああいう噂って広めるもんじゃないし」
「まぁ、確かにそうだけど……」
少なくとも噂されて嬉しい類いのものじゃない。自分が当事者であれば、もう放っておいて欲しいと思うに違いない。
知らなかったからこそ、野口に対して不用意な発言をしていなかったか、つい考え込んでしまう。
「今、あっちこっちで噂になってるのもを聞いてる？」
「野口さんの件じゃなくて？」
「違う。山吹さんの噂」
「私の？　私、噂されるようなネタは何ももってないけど」
途端に困ったといわんばかりの顔を見せる内海に、少しだけ不安を覚える。それは多かれ少なかれ、いい噂じゃないことが伺えたからだ。
「どんな噂？」
「山吹さんが……売春してるって」
「……そんな突拍子がない噂が立ってる訳？」
呆れたという気持ちを隠すことなく内海を見れば、内海が少しだけ身体を縮めたのが分かる。
「それが、結構広まっていて変に具体的な内容も出回ってるから気になって」
「気になって、っていうのは私が本当に売春しているか、ってこと？」
「違うよ。山吹さんの耳に入っているのか気になって。自分が分からないところでコソコソ噂されるのって面白くないだろ」

確かに面白いものではない。けれども、噂なんてものは当人の与り知らぬところで広まるものだとも思う。実際、野口の噂も噂であって事実かどうか、由香里は知らない。
「……具体的な内容ってなに？」
「会社近くにあるKホテルから年の離れた男と出てきたとか、社内の誰々と不倫してるとか」
「誰々って、具体的に名前が出てるの誰？」
「……うちの課長」
「えーと……ごめん、私にも選ぶ権利があると思うんだけど」
内海とは同じ二課だから、この場合噂の相手というのは薄井のことだ。けれども、あの陰気さ故に近づきたくないと思う相手と付き合うなんて絶対に無理だ。むしろ、あの薄井と結婚している奥さんを褒めたたえたいくらいだ。
「まぁ、噂だから」
「噂ねぇ……」
ここで必死になって否定したところで、騒ぎが大きくなるだけで由香里の得にはならない。噂というのは、そういうやっかいなものだ。
けれども、その話しを聞いて分かったことがある。
「営業部でもその噂を知ってる人間が多いってこと？」
「正解。あからさまに態度にだす人間もいるし。ほら、さき相沢さんのところで他の営業に突っかかられたのも、そういう噂のせいだと思う。実際、あの噂が流布するまで、あの二人もあんな態度とってなかったし」
売春と聞いて、面白おかしく噂を広める人間もいれば、不快に思う人もいると思う。それにプラスして課長との不倫とくれば、嫌悪する人が出てもおかしくない。一課の人間だけではなく、松本の態度にもようやく納得がいった。
少なくとも、由香里が他人の立場であれば、真偽の有無に限らず、そんな噂が立つ人間と関わりたくない。面倒に巻き込まれたくない

し、近づくことで自分も噂のネタにされるかもしれない、という微かな恐怖があるからだ。
「とりあえず、そういう噂が部内に広がってることは分かった。教えて貰って良かったと思う」
「不愉快な話しでごめん」
「別に内海さんが噂を立てた訳じゃないでしょ？」
その問い掛けに内海が慌てて首を横に振る。その動作が必死すぎて、おもちゃじみていたことで笑いを誘われる。
「分かってる。私も内海さんがそうだとは思ってない。でも、思い当たる節もないし、どうしてそんな噂が流れ出したんだろう」
「恋人は？」
「今はいない。少なくとも数年いた記憶がないから、噂を立てられる理由が分からない。そもそも課長と不倫なんて、絶対したいと思わないけど。でも、どうしてそんな話しになったんだか」
別に恥ずかしくはないけど、探られると面倒だから年齢イコール恋人なし、ということは言わなかった。けれども、嘘はついていない。
由香里としては、売春云々という遠い話しよりも、薄井と不倫という噂のほうがずっと気分が悪い。少なくとも由香里は薄井に好意なんてものは欠片もないし、もし言いよられたとしても本気でお断りだ。
「少し前に山吹さん香水変えたでしょ」
「もう夏も終わるから変えたけど」
「同じタイミングで課長も変えたの知ってる？」
「正直、課長にそこまでの興味がないから全然知らなかった」
「その香水がお互いに送りあったものだっていうのも噂になってて」
もう呆れて溜息しか出てこない。噂というのは遠くにいればのんびり聞いていられるけど、当人になれば楽しいものじゃない。それがこんな噂であれば益々不愉快になる。
「それで、内海さんはわざわざ私に本当か確認したかったの？」

「違う、噂を信じていた訳じゃない。ただ、一課の連中がどうしてああいう態度を取ったのか、不思議そうな顔をしていたから、一応小耳に入れておこうかと思って」
「知らないより知ってた方がいいよ。一応当人だし不自然さは感じてたから」
すっかり冷めてしまったコーヒーに口をつけるけど、苦みしか感じず少しだけ飲んでソーサーに戻す。
折角美味しい食事と楽しい時間だったのに、酷く胃がもたれる気分にさせられる。それでも話しを食事の後にしてくれた内海に感謝すべきかもしれない。少なくとも、食事は美味しく取れたのだから。
「色々教えてくれてありがとう。余り気にしないことにする」
「噂なんてすぐに治まると思うから」
どこかぎこちない空気のまま二人で席を立つ。自分が誘ったから支払うという内海に、由香里は譲ることなく自分のことを教えてくれたのだから、と二人分の代金を払う。結局、押し問答の末に割り勘ということになり、苦笑気味に店を出た。
駅までの道のりを二人並んで歩き出す。二人の間に会話はない。しっとりと湿ったぬるい風が頬を撫でる。それを不快に思いつつ、大きな公園を抜けていく。
その途中、背後から名前を呼ばれて立ち止まる。隣を歩いていると思っていた内海は、数メートル後ろにいて、まっすぐに由香里を見ていた。
「どうかしたの？」
「もし良かったら付き合ってることにしないか？　そしたら噂なんて一掃できるし」
それは由香里にとっても悪くない話しだ。内海にそんな気が本当にないのであれば、少しくらい心惹かれたに違いない。けれども、内海はそうじゃないことを由香里はもう知っている。
一緒に食事をした時に向けられた視線、あれは同期に向けるようなものじゃない。だからこそ、由香里の返事は即答だった。

「無理」
「なんで？　その方が楽でしょ？　俺もある程度フォロできるし」
「本当にそれだけの気持ちだったら、少し考えたと思う。でも、内海さん違うよね」
　まっすぐに内海を見つめ返せば、さきに視線を反らしたのは内海の方だ。まるで表情を隠すように髪に手を入れるとくしゃりと軽く握り、それから大きく溜息をついた。
「……それなら、本気で好きだから付き合って下さい、って言ったら？」
「それも無理。ごめん、私恋愛を心底蔑んでるから、どうあっても誰かと恋愛することはできないと思う」
「うん、ダメもとで玉砕してみた」
　ゆっくりと手を下ろした内海が、口角を僅かに上げる。それが自嘲の笑みだとうことは由香里にも分かった。
「ごめん……」
「謝る必要ないから。それを薄々分かっていて告白なんてしたのも俺だし」
「分かってた？」
　それは意外な言葉だった。少なくとも、そんなあからさまな態度を取ったことは一度だってない。恋愛に奥手と思われても、恋愛を蔑んでいることを知られているとは思ってもいなかった。
「だって、同期連中で恋愛話になっても、山吹さん絶対に乗ってこなかったし。それに、聞かれたら空気読んでやんわり返してたけど、イライラしてるのは分かってたから」
「イライラしてた？」
「してた。山吹さん、イライラすると親指の爪を反対の指で撫でる癖があるの知ってた？」
「……知らなかった」
　まさか自分がそんなことをしていることすら知らなかった。それだけ、内海は由香里を見ていた、ということかもしれない。

「俺だけが知ってる山吹さんの癖」
そう言って笑うと、内海は両手を上げて大きく伸びをした。百九十近くある内海は、社内でも長身なほうだ。その身体が大きく伸び上がると、公園内にある照明に照らされて、道の上に長い影が落ちる。
「玉砕したけど、諦めるのは無理。でも、誓って山吹さんに気持ちを押し付けるようなことは二度としない。だから、山吹さんもこれから同期として接して。告白したことも忘れていいから」
「随分思い切りがいいんだ」
「諦め悪いけどね。でも、玉砕したことなんて覚えていて欲しいもんでもないでしょ。それに、変に気遣われるのも、避けられるのもイヤだしさ」
「それでいいなら、私は助かるけど……」
「そんな悪いな、って顔をしないでよ。つけ込むよ？」
そう言って朗らかに笑う内海は、そういう姑息な真似はしないと長い付き合いで知っている。少しでも由香里の心を軽くするために内海が気遣っていることが分かる。。
「山吹さん、ＪＲでしょ？　俺、地下鉄だからもう少しさきなんだ。改札まで送ったほうがいい？」
どこかからかい含みに聞いてくる内海に、由香里は「いらないから」って笑って返す。空気を軽くしようとする内海に、由香里も乗っかる形で笑う。
通りを渡った向こう側にはＪＲの駅がある。一旦その場で足を止めて、それから近づいてきた内海と向かい合う。
「色々教えてくれてありがとう。本当に知らないより知ってる方がいいと思ってる。でも内海さんが噂を気にする必要は全くないからね」
「俺としてはもう少し頼ってくれると嬉しいんだけどね。何かあったら言えよ。少しくらいは力になるから」
そう言って優しい顔で笑う内海に、少しだけ罪悪感を感じながら

も小さく頷いた。
「それじゃあ、また明日」
「おう、お疲れ！」
手を振る内海に軽く手を振り返して、由香里は駅に向かって大通りに掛かる横断歩道を渡り出す。まさか、それが内海の姿を見る最後になるとは考えもしなかった？？？？。

Act. 03

いつものように始業三十分前に会社へ着くと更衣室へ向かう。制服着用が義務づけられていることもあり、それはいつもと変わらない朝の風景だ。

更衣室前で聞こえてくるざわめきもいつもと変わらない。けれども、扉を開けた途端ざわめきが一瞬にして消えた。不思議に思いながらも中へ入れば、中にいた女性社員全員の視線が由香里へと向けられる。

「おはようございます」

途端にそれぞれ視線が反らされて、もごもごと挨拶を返される。昨日とは違う反応に、内海から聞いた噂を思い出した。

恐らくここにいるのが友人であれば、弁解の一つでもしたかもしれない。けれども、ここにいるのは会社繋がり程度の人間で、知人以上でも以下でもない。

だからこそ由香里は気にした様子もなく、自分のロッカーを開けると黙々と着替えを始める。他の社員たちは無駄口一つなく、早々に着替え終えると更衣室を出て行ってしまう。

取り残された由香里は小さく溜息をつくと、仕方ないかと納得する。あんな噂を聞けば面倒ごとには巻き込まれたくないだろう。それに仲がいい人相手であれば、否定もして回るし、話しを聞こうとも思うが、由香里はそういう人間関係を作ってこなかった。

ある意味、自業自得な面もあるから他人の行動に怒る理由もない。ただ、面倒なことになってるな、とは思う。

由香里の後から来た人間も挨拶はするけど、その後話し掛けてくることもない。けれども、そわそわした様子でこちらを伺ってくる。その視線が面倒だ。

だからこそ、由香里もいつも以上に手早く着替え、髪を纏めてバレッタで留めると、早々に更衣室を後にした。途中、給湯室に立ち

寄り、コーヒーを一杯用意してから課内に足を踏み入れた。
挨拶と共に中へ入れば、ポツポツと返ってくる挨拶。けれども、昨日に比べたらさらに少なく、部内でもほとんどの人間が例の噂を知っているのだと分かる。
それでも挨拶をしてくれる人たちは、噂を知らないのか、もしくは知っていても噂でしかないと思っているのか、挨拶くらいは返しておこうと思っているのか、今の由香里には分からない。
恐らく由香里であれば、挨拶くらいは返しておくに違いない。例え内心に嫌悪があろうと。
あからさまに由香里と、そして二課課長である碓井を交互に見ている人間もいる。ここで違うと騒げば、逆に疑いを深めることになる。あからさまな視線は楽しいものではないけど、気にしないようにして自席へと腰を落ち着けた。
客先に直出人間もいるが、やはり朝一は出社する人間の方が多い。人間が増えれば増えただけ、あちらこちらでヒソヒソと囁きながらこちらを見る目が多くなる。
集団生活というのは本当に面倒だと思う。一層のこと、誰かが聞きにきてくれたら、思い切り否定することもできるというのに、こういう状況が一番面倒だ。
そもそも、由香里が思っていた以上に、噂を鵜呑みにしている人間が多いことに驚くよりもさきに呆れるしかない。
そんなことをグダグダと考えながらも、由香里の手は既に仕事をするためにキーボードの上を走っていた。そして、部内にも徐々に人が増えて行く。
始業時間は九時からではあるが、どうせなら早く始めて早く帰れるなら早く帰りたい。だから、周りの目は違うけど、こうして仕事を始業前に始めるのは由香里の日常だ。
九時になり、始業のチャイムが鳴る。チャイムが鳴り終わると同時に、部内に現れたのは専務だ。滅多に現れることのない専務の登場に、あちらこちらからヒソヒソと交わされる会話。

専務はそんな部内の様子は気にすることなく、部長である江崎、そして課長である空峰、碓井を呼ぶと、指だけで別室へと促した。三課の課長である大内も呼ばれていたが、大内はまだ出張から戻っていない。

すぐさま四人は部内から出て行ったけど、これはある意味異常事態だった。まず、専務が営業部に顔を出すなんてことは一年に一度あるか、ないかという程度だ。

いや、でもつい最近専務をここで見た記憶がある。それを思い出せば、例の野口を襲ったと噂の高井が辞める前日、やはり同じように専務が部内に現れた。そして、今と同じように役職四人を呼んで別室へと移った。

しばらくざわめきが広がったが、それぞれが仕事を始めると徐々にざわめきは落ち着いてくる。けれども、部内全体が浮き足立つ、そんな感じに見えた。

「山吹さん、内海から連絡貰ってるか？」

部内に聞こえるくらいの大きさで声を上げたのは松本だ。言われて始めて行き先が書かれたホワイトボードに視線を向ける。内海の名前の横には帰宅のマグネットがつけられたままで、今日も朝から出勤の予定だったらしい。

けれども、既に九時は過ぎている。幾つか二課にも電話は入っていたけど、内海からのものはまだない。

「いえ、まだ今日の連絡はありません」

「なんだ、昨日から一緒だったんじゃないのか？」

顔中に下卑た笑みを浮かべた松本がこちらを見ている。途端に周りから好奇の視線が由香里に向けられたのが分かる。

「一緒ではありません。こちらから連絡を入れてみますか？」

「ふーん……まぁ、いいや。三十分になっても出勤してこなかったら入れて」

「分かりました」

別に後ろ暗いことはない。挑発されていることは分かっていたか

ら、それに乗ることもせずに、手短かに話しを終わらせると再びパソコンに向かう。
ようやく集まる視線から解放されたにも関わらず、再び注目される羽目になったのはそれから五分後のことだった。
慌てた様子で戻ってきた碓井が、部屋に入るなり珍しく大きな声を上げた。
「山吹さん、ちょっと来て貰えるかな」
どうして自分が呼ばれるのか訳が分からない。それでも椅子から立ち上がると、由香里は碓井と共に部屋を出た。
背後からはざわめきが聞こえていたけど、今はそれほど気にならない。ただ、不安だけが大きくなっていく。前を歩く碓井は何も言わない。けれども、焦っているのか慌てているのか、いつもよりもかなり歩調が速い。
エレベーターに乗って連れて行かれた先は、社長室横にある応接室。ノックする碓井の後ろで、由香里は緊張で乾ききった口内で唾を飲み込む。
「碓井です。山吹さんを連れて来ました」
「入れ」
扉を開けて碓井に中へ入るように促される。会長や社長を筆頭に、それぞれの部長がいて、そして営業部の課長が顔を並べる。一瞬にして、背筋に脂汗が滲む。
「君が山吹さんか。少しお話しを聞きたいのでこちらへ」
そう言って見たことのない顔が、正面の席を勧めてくる。少なくとも、その顔に見覚えがないこともあり、碓井と通り越し江崎へと視線を向けた。
小さく頷く江崎を見て、酷く落ち着かない気分で正面の椅子に座る。会長と社長、そして社外の人間だろう二人、そして由香里、座っているのはその五人だけだ。それ以外の人間は周りを囲むようにして立っていて、緊張が高まる。
「私は桐谷。こういう者です」

「同じく根本です」
二人が揃って由香里に見えるように翳したのは警察手帳だ。
何故警察がここにいるのか、何故自分だけがここに呼ばれたのか。困惑しながらも緊張する自分がいる。
「内海綾人さんをご存知ですね？」
「はい、同じ課で同期になります」
「その内海さんが、昨晩、何者かに殺害されました」
「え……？」
内海とは昨日笑って別れた。だからこそ、とっさに話しを飲み込むことができない。理解が追いつくよりも先に、桐谷という刑事が話しを続ける。
「昨晩、トランというお店で内海さんとお食事を一緒になさったとか」
「……はい、確かに二人で食事をしました」
「その時の彼の様子は？」
「特別変わった様子はありませんでした」
「失礼ですが、どんなお話を？」
話していた内容のメインは例の噂話についてだ。確かに内海の口調からはかなり広がっている様子だったが、上役がいる前で話したいことではない。
「……プライベートなことなので、ここではちょっと」
「あぁ、そうですよね。申し訳ない。何時頃、内海さんとは別れましたか？」
「時間は覚えていませんが、家に帰った時に十時半を回っていたと思います」
「誰か証明できる方は？」
心臓がうるさいくらいにバクバクいってる。まるで身体中が心臓になってしまった気がするくらい鼓動がうるさい。
カラカラに乾いた唇で、どうにか由香里は口を開いた。
「……一人暮らしなのでいません。あの、疑われてるんでしょうか

？」
　それはらしくもなく、震えて掠れた声だった。
「いえいえ、そんなことありませんよ。一応、身近な方には全員にお聞きする規則なので」
　にこやかに笑う桐谷だったが、その目が笑っていない。桐谷の隣に座る根本は、もっとあからさまに疑わしげな視線を投げてくる。
「私……内海さんを殺すようなことしません！」
「分かってるよ」
　本当に分かってるのだろうか。こんなこと、これだけ役員の揃った場所で聞かれたら、間違いなく由香里が疑われるのは目に見えている。しかも、あんな噂の後だけに何をどう言えばいいのか分からない。
「内海さんとの関係を聞いても？」
「関係も何も、同期で……友人、だと思います」
　内海とは気が合い、遠慮がいらない関係ではあった。けれども、友人というほど近い距離ではないし、知人や同期というほど離れてもいない。こういう場合、どう表現すればいいのか分からない。
　だから微妙に歯切れの悪い答え方になってしまえば、気にした様子もなく桐谷は言葉を続ける。
「恋人ではないんですか？」
　その問い掛けに、ふと昨日の告白を思い出す。少なくとも由香里は気を持たせるような真似をしたつもりはない。ただ、内海が亡くなった今、強い言葉で否定するのは良心が咎めた。
「……ありません。それは断言できます」
　だから答えた声は自然と静かなものになり、トーンも先程に比べたら落ちたものになる。
「そうですか。……別れた時間だけでも証明できたらなぁ」
　溜息混じりで呟いた桐谷に、由香里は証明できる何かを考えてみる。けれども、昨日は食事を取ったからいつものようにスーパーやコンビニにも寄り道していない。

内海と別れてからの行動を何度かなぞり、そんな中で一つだけ証明できるものを思い出す。
「あ……スイカ」
「スイカ？」
「ＪＲで使うスイカです。あれに履歴が残ってるから、改札に入った時間と出た時間は分かります」
「今持ってる？」
問い掛けながら、桐谷がわずかに身を乗り出してきた。そんな桐谷に由香里は頷き返す。
「自分の席へ戻ればあります」
「確認してきますのでお預かりしても宜しいですか」
「はい、それなら今すぐ持ってきます」
「根本、一緒についてけ」
「分かりました」
別に逃亡するつもりなんてない。けれども、見張られている気がして気分は重い。一旦失礼して部屋を出ると、小さく溜息をついた。
これで部外者である根本が刑事だと分かったら、また部内で何を言われるか分からない。正直面倒だと思うけど、逃げ出す訳にもいかない。
別に特別正義感が強い訳じゃない。できたら事なかれ主義だと自覚はある。それでも、内海が亡くなったというのは、由香里にとって衝撃的だった。
だから、つい背後をついてくる根本に声を掛けてしまった。
「あの、内海さんが殺されたって……本当ですか？」
「残念ながら」
「でも、内海さん明るい人ですし、殺されるようなタイプじゃないと思います」
「勿論、怨恨なのか、通り魔なのか、まだ捜査中なので分かりません。そのためにご協力頂けませんか？」
「それは、勿論お役に立てるのであれば、幾らでも協力させて貰い

ますけど」
「けど？」
一旦歩みを止めると、振り返り根本を見上げた。
「……私、疑われてるんですよね。最初に呼ばれたくらいですし」
「いえ、本当にそういう訳じゃないんです。ただ、内海さんと山吹さんがご一緒だったという目撃情報があったので、一番最初に色々聞いてみただけです。正直、うちとしては内海さんの恋人だと思っていたのですが」
「すみません。本当にそういう関係じゃなかったので。ただ、私としては同期で一番仲が良かったです。内海さんが私をどう思っているのかは分かりませんが」
それだけ言うと、再び由香里は廊下を歩き出す。
内海からしたら、告白をしたくらいだから、由香里の立場は友人という立ち位置ではなかったに違いない。
疑われている。それでも告白云々について伝える気になれなかったのは、自分が無碍にしたことが原因だ。死んでしまった内海に、振られた男という汚名を着せたくなかった。
いや、それよりも、自分が責められたくなかったのかもしれない。確かに振ったのは由香里自身だったが、そのことで色々言われたくなかった。
自分可愛さ、そう考えると滅入った気分になる。自分の中にそんな自己保身を計ろうとする気持ちがあることを知りたくなかった。
「内海さんは恨まれるような人ではなかった？」
「少なくとも私はそう思います。けれども、他の方の意見はどうだったのか分かりません。正直、私は会社の人とはそれなりの付き合いしかしていないので」
「それはわざと、なのかな？」
「えぇ、会社で問題起こすと後々面倒そうな気がして。少しこちらでお待ち下さい」
営業部の前に到着すると、根本に声を掛けてから部屋に入った。

途端にざわめいていた部屋が静まり返る。
「山吹さん、あのデートの後で内海のこと殺しちゃったの？」
そんなとんでもないことを言い出したのは、昨日から少しおかしい松本だ。どういう経緯か分からないが、由香里がいない間に内海が亡くなったことは広まったらしい。それに対して、由香里は怒る気にもなれない。
「別にデートでもありませんし、私に内海さんを殺す理由はありません」
「でも昨日、内海と二人で会社出て行っただろ」
途端に周りがざわめきだしたけど、由香里としては怒る気にもなれない。どちらにしても、きちんと真実が分かれば突っかかってくることもなくなる。それまでの我慢だと思いながら、いつも自席に置いてある鞄からパスケースを取り出した。
「出て行ったからどうかしたんですか？　別に一緒に食事して駅前で別れましたよ」
「恋人でもないのに？」
「同期ですから」
「セフレだったんだろ？　それとも、内海から金貰ってた？」
下卑た笑いを浮かべる松本に呆れながらも、由香里は周りを見渡す。けれども、向けられる視線は好奇、蔑み、そんなものばかりで小さく溜息をついた。どうやら、由香里が思っている以上に噂は広がっていたらしい。
「ご期待に添えなくて申し訳ありませんが、セフレでもなければ、内海さんとはお金を貰うような関係でもありません。余り誹謗中傷がすぎると、こちらとしても出るところ出ますけど」
しっかりと松本の顔を見てそれだけ言えば、松本の笑みが一瞬にして固まり、舌打ちする音が聞こえた。
視線を集めていることに気付きながら、由香里はそれ以上何かを言うことなくパスケースを手に部屋を出た。
出入り口近くで待っていた根本に、酷く同情的な視線を向けられ

て由香里としてはどんな顔をすればいいのか分からない。ただ、無駄に大きな声で話していた松本は、根本に聞かせたかったのかもしれない。

「……微妙な立場にさせてしまったみたいで申し訳ありません」

「別に構わないです。少し前からおかしな立場だったみたいですから」

「おかしな立場、ですか？」

「えぇ、隠しておいても分かると思うのではっきり言うと、少し前から私が売春しているという噂が立っていたみたいで。でも、私は余り他の人と付き合いがないから、その噂を知らなかったんです。それで、昨日、噂について内海さんが教えてくれたんです」

嘘はついていない。ただ、自分で言いながら、果たしてこの噂はどちらに傾くのかは気になった。これを聞いた根本は、果たして由香里を犯人と思うのか、関係無いと思うのか。勿論、それを聞いたところで根本が答えるとは思えない。

「そういうことだったんですか」

それだけ言うと根本は黙り込んでしまい、由香里も同じように口を噤んだ。

その足で応接室に戻り、スイカを桐谷に渡してしまえば、仕事に戻って構わないと言われた。それから応接室を追い出されるように出ると、由香里はもう何度目になるか分からない溜息をついた。

あの状況で自席に戻るのはかなり厳しいものがある。だからといって、ここで立っていても仕方ない。

酷く足取りは重かった。けれども、自分は何一つ悪いことをしていないのだから、そう思って営業部前で深呼吸してから部屋に入る。

途端に向けられる視線を見なかったことにして自席に座ると、あちらこちらからヒソヒソと会話を交わす音が聞こえる。けれども、何を言っているのかまでは聞き取れない。

視界の端では松本がニヤニヤと笑い、それが腹立たしく思う。けれども、ここで激昂すれば由香里の立場はさらに悪くなる。それが

分かっているからこそ、由香里は仕事を進めるべくパソコンに向かう。

十分程してそれぞれ課長が戻り、その五分後には部長も戻ってきた。その後からは二課の人間が一人ずつ呼び出され、色々聞かれたらしい。勿論、その内容はひそやかに交わされていたが、それを由香里に教えてくれる人間は誰一人いない。

元々、会社の人間との距離感なんてこんなものだった。そう思うのに、避けられている気がしてならない。だからこそ、落ち着かない気分で気が滅入る。

しかも資料が足りずに課内の人間に声を掛ければ、誰一人として返事をしない。どこかピリピリとした雰囲気の中、午前中の就業は終わった。

昼休みになると、足早に部屋を出たのは集まる視線が煩わしかったからだ。逃げるつもりはなかったけど、他人から逃げたように見えたかもしれない。

そんなことを考えたのは、会議室に到着して椅子にぐったりと身体を預けてからだった。とにかく自席に座っている最中、針のむしろというのはこういうことなんだと身をもって知った。

いずれ事実が分かれば、こんな噂は消え去る。それまでの我慢だと思っていた。

けれども、内海が亡くなってから二日、三日と経つ内に、由香里の状況は徐々に変化していった。

まず、挨拶が返されなくなった。すれ違う時にクスクスと笑う女性社員。あからさまに嫌な顔をする男性社員。そして極めつけは、朝出社して自席に飾られた菊の花　　。

一緒に昼食を取っていた倉田は、遠回しに断ってくるようになり、今では遠巻きにしている女性社員たちと共に由香里を見て嘲笑うこともある。

別に友人だった訳ではないから、こういう状況では仕方ないと納得している部分もある。ただ、噂に振り回されるなんて馬鹿らしい、

という思いは消えなかった。
桐谷から返されたスイカからアリバイはほぼ確認された筈なのに、犯人が捕まらないが故に広がる犯人説。
いずれ理解されると思っていたけれども、日々状況は由香里の想像していなかった方向へと流れていく。こうなると噂の暴走を止められる筈もなく、弁解しようにも弁解するべき相手がいない。
それは社内での完全な孤立でもあった。当たり前だが業務にも支障をきたし、余りなかった残業も嫌がらせと比例して徐々に増えていく。
携帯や家には無言電話の嫌がらせが始まり、連絡が余りくることのない電話は家電も携帯も電源を切った。
そんな中でも態度が全く変わらなかったのは、課長である碓井、部長である江崎、そして事務長である渡瀬だ。
基本的に寡黙で何事にも関わらない碓井はともかく、江崎と渡瀬は遠巻きながらも由香里を気遣ってくれたことは分かった。
だからこそ、逃げ出さずに毎日会社に通勤し業務をこなした。それでも、一週間もすれば、胃はキリキリと痛むようになっていたし、鏡に映る顔からは徐々に肉が削げ落ちていった。
由香里は疲れていた。疲れていたからこそ、普段投げやりだった思考が、徐々に攻撃的になる。
だから勝ち誇ったような顔ですれ違った松本の腕を掴んだのは、反射的なものに近かった。
「何だよ、離せ」
「私、最初に言いましたよね。これ以上、噂を広めるようであれば出るところに出ると」
途端ににやけた顔から笑みが消える。由香里が一歩近づけば、松本は一歩背後へと下がる。見るからに怯えたような、引き攣った顔をしている。
「俺のせいじゃないからな」
「そうですか？　松本さんが、あんなことを言い出さなければ、こ

こまで噂は広がらなかったと思いますが？　近い内に法的手続き取らせて頂きます」
社内で問題は起こしたくない。そう思っていたけど、色々な意味で限界だった。松本に声を掛けた段階で、退職の文字がちらつく。
言い捨てて松本の手を離すと、逆に由香里の腕を掴まれた。
「法的手続きって、名目ないだろ」
「名誉毀損って知ってます？　事実でも名誉毀損は立証できるんです。そもそも、松本さんは私に何の恨みがあるんですか？」
「恨み……俺は別に山吹に恨みなんてないよ。ただ……」
そのまま口籠もると、振り払うようにして腕を離すと踵を返して足早に立ち去ってしまう。掴まれた腕は鈍い痛みとしびれ、そして不可解さを残し、由香里は小さくなる松本の背中を挑むように睨みつけた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4768w/

悪意の回廊

2011年9月27日02時31分発行